史跡斎宮跡　第152次調査現地説明会資料

２棟の四面庇付建物（北から）

平成１９年１１月１０日（土）

斎 宮 歴 史 博 物 館

1　はじめに

史跡斎宮跡では昭和４５年度に発掘調査を開始して以来、今年で３７年目になりますが、これまでの調査で史跡の東部で平安時代の都市計画ともいえる碁盤目状の地割(「方格地割」と呼んでいます)が見つかっています。

この地割は幅約１２ｍほどの区画道路をはさんで、一辺約１２０ｍの方形の区画を重ねたもので、方形の区画が東西で七列、南北で四列見つかっています。この「方格地割」は京都の長岡京や平安京とよく似ていますが、斎宮の場合、一般の庶民までが住むまちではなく、斎王の住む宮殿である「内院」と、斎宮の官庁街（「官衙」ともいいます）であったと考えられています。中でも現在は竹神社の境内地となっている区画（「牛葉東区画」と呼んでいます）と、その東側の区画（「鍛冶山西区画」と呼んでいます）は、区画内を大規模な掘立柱塀が大型の建物を厳かに囲む「内院」に相当する区画であることが発掘調査で確かめられています。

今回の第１５２次調査は、その内院とみられている「牛葉東区画」のすぐ北側にあたる「柳原区画」を調査しました。過去の調査では平安時代の大型掘立柱建物がみつかっており、斎宮の官庁街の中でも重要な場所であった可能性が想定されていました。現在約２，３００㎡の面積の遺構の調査が終了しています。

2　見つかった遺構

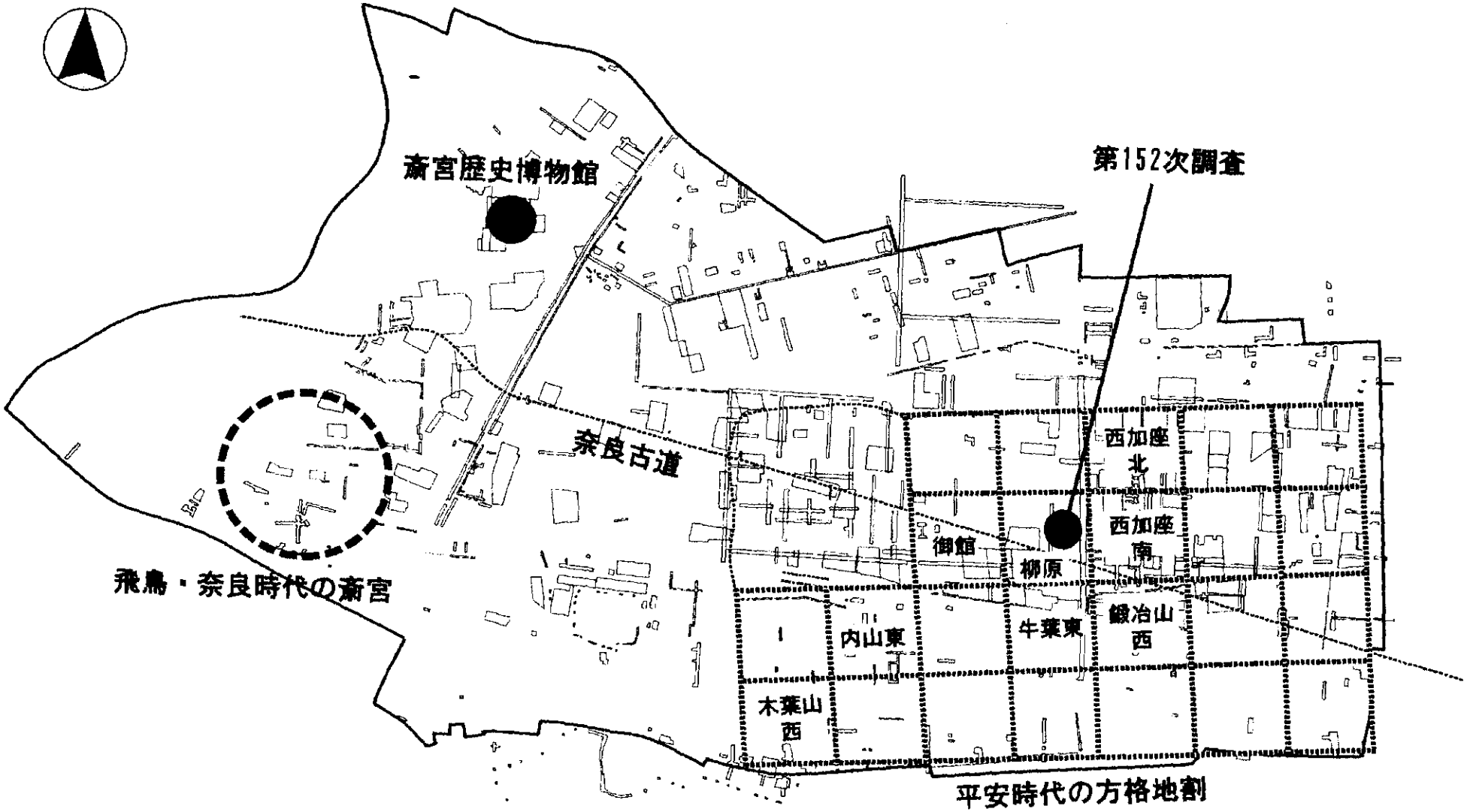
（奈良時代の古道）

第１５２次調査区の中で最も古いとみられるのは、調査区の南辺を通る通称「奈良古道」と呼ばれる幅約９ｍの直線道路の北側の側溝です。この道路は斎宮歴史博物館の南から、史跡の東端まで約２km が発掘調査で確認されており、昨年度には史跡のさらに東の丁長遺跡でそのつづきが見つかり、３ｋｍ以上の長さがあることがわかりました。この道路は古代の大和と伊勢を結ぶ国家的な幹線道路だったと考えられます。そしてこの道路は奈良時代の終わり頃（８世紀末）に史跡東部に斎宮が移り、方格地割が造られると寸断されたかたちになってしまいます。

（平安時代の掘立柱建物）

方格地割が造られたのちの遺構は、まず調査区のほぼ全域で平安時代の掘立柱建物が見られます。見つかった柱穴は多く、すべての建物の検討がすんではいませんが、これまでに３１棟を確認しました。建物の時期も平安時代の前期（９世紀頃）から末期（１２世紀）のものまであり、この一帯が斎宮の官庁街として平安時代を通じて機能していたことが分かりました。

今回の調査区内で最も注目されるのは、調査区の南半で見つかった掘立１～３



方格地割と第 152 次調査区

の３棟の「庇付建物」です。この庇付建物というのは建物の中央の身舎の外側に庇がつく建物で、古代の建物でいう庇は身舎のみの建物より広い空間を必要とする場合につけられ、中世から現代の建物のように縁側につくようなものではありません。こうした庇付建物は一般に身舎のみの建物より格が高いものとされることが多いようです。

特に掘立１・２は、３間×２間の東西方向に長い身舎に、東西南北に１間分ずつ庇が付く「四面庇」の建物、掘立３は３間×３間の身舎に東西南に庇の付く「三面庇」の建物です（「間」は柱と柱の間を数える単位）。建物の時期は平安時代の前期（おおむね９世紀代）とみられ、掘立１→２→３の順で建てられています。

調査区南東のＳＢ９００７（※）は、一部が第１４３次調査で見つかっています。今回南北で３間、東西で４間以上の東西に長い建物であることが判明しましたが、西から２間分のところに間仕切り状に２個の柱穴が見つかっています。斎宮跡の掘立柱建物ではあまり例のない形で、これも平安時代前期のものと考えられます。

この他の建物はまだ調査・検討中であるため、詳細な時期の決定はできていませんが、庇付建物以外の平安時代前期の建物は調査区南と東に多く、調査区の北西には平安時代後期以降（１０世紀後半～１２世紀）の建物が多いようです。全体に平安時代前期の建物の柱穴は、柱を埋めるために掘った穴（「柱掘形」といいます）が四角い形であったり、円形でも直径が４０ｃｍはあるものが多いのですが、後期になると直径３０ｃｍ以下の円形のものが多くなり、小ぶりな建物が多くなっていくようです。また、調査区の東半を中心に５間×２間ないし３間×２間の南北方向に長い建物が多いことも特徴です。

（区画内の溝）

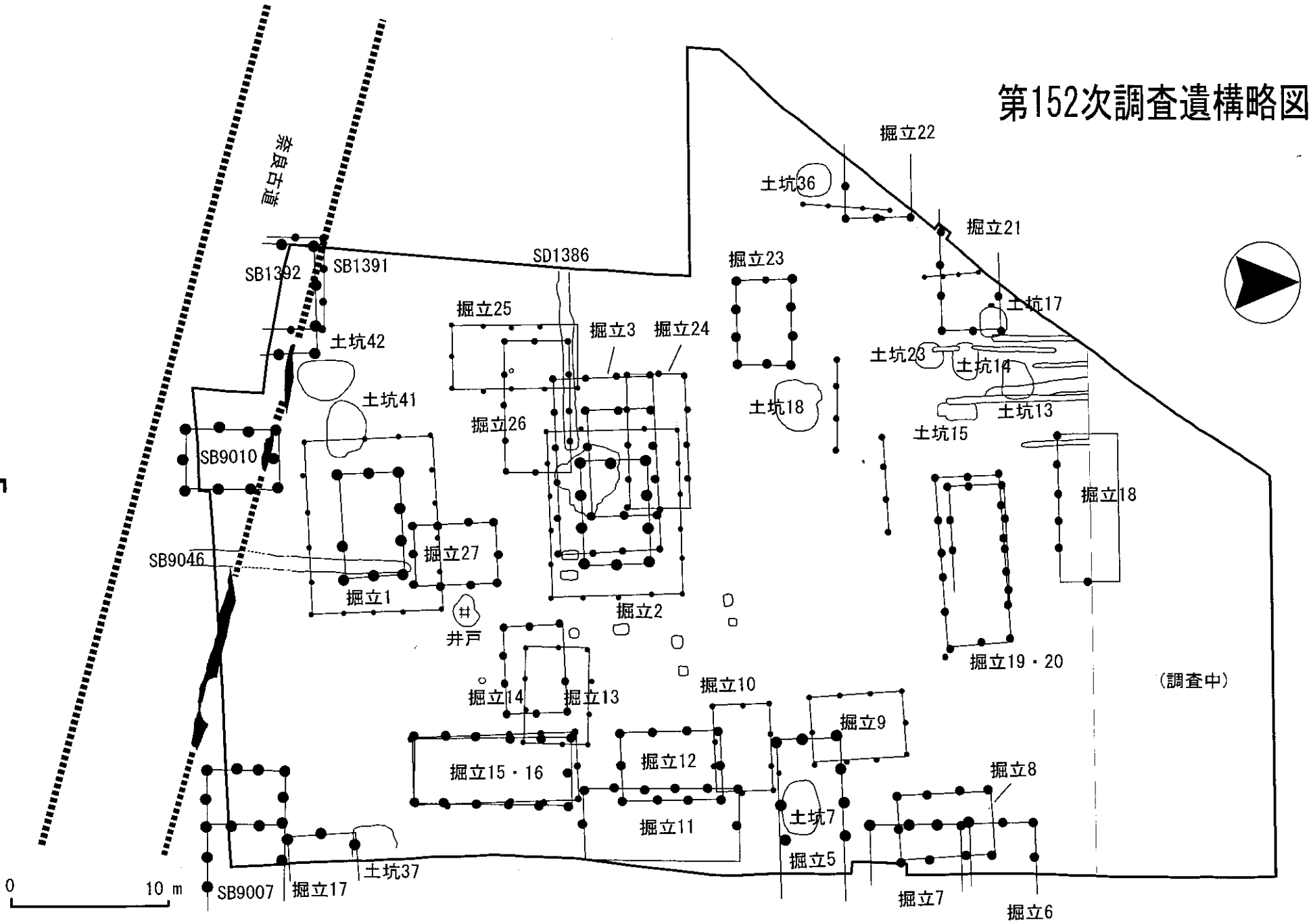
調査区の南半分には、柳原区画の内部をさらに区画するためのものとみられる平安時代前期頃の溝が２本見つかりました。東西方向のＳＤ１３８６と南北方向のＳＤ９０４６です。この溝は幅５０～８０ｃｍほどあり、いずれも柳原区画内で途切れたり、底の勾配が区画全体の排水溝である区画道路側溝に向かって傾いていないため、排水用よりは区画内の細分のための役割をもった溝ではないかと考えられます。今後、区画内の建物の時期を詳細に検討していくことで、こうした区画の細分の状況がさらに明らかになっていくと考えられます。

一方、調査区の北西には幅３０ｃｍ程度の細い溝が多数見つかりました。平安時代後期のもので、これらもあるいは区画の区分に関係するものかもしれません。

（土器が多量に出土した土坑）

調査区の南の土坑（大きな穴）４１・４２からは平安時代初期～前期の土器を多量に出土しました。大部分が杯・皿・高杯など食膳に使う形の土師器で、鍋や

第152次調査遺構略図



甕などの貯蔵や煮炊きに使うものが少量含まれます。須恵器は少ないのですが、杯・高杯や壺などの破片があります。土師器の杯には完全な形で出土したものもありますが、柳原区画の南の「内院」地区で見られるような、まつりや儀式で使ったものをそのまま大量に廃棄する通称「土器溜り」と呼んでいるものではなく、一般の廃棄用の土坑ではなかったかと考えています。周辺の掘立柱建物で働く役人などが捨てたのでしょう。

調査区の北にも平安時代前期や後期の土坑があります。土坑３６からは１１世紀頃の比較的多量の土器片が出土していますが、他の土坑からはあまり土器片の出土がありません。木や紙、布などでできた土中で残らないものが捨てられたのでしょうか。

（その他の遺構）

調査区の南半で井戸が１つ見つかっています。直径が２m程度と小型のものです。現在底まで調査していませんので、時期は明らかではありませんが、上部の土から平安時代前期の土器片が出土しています。

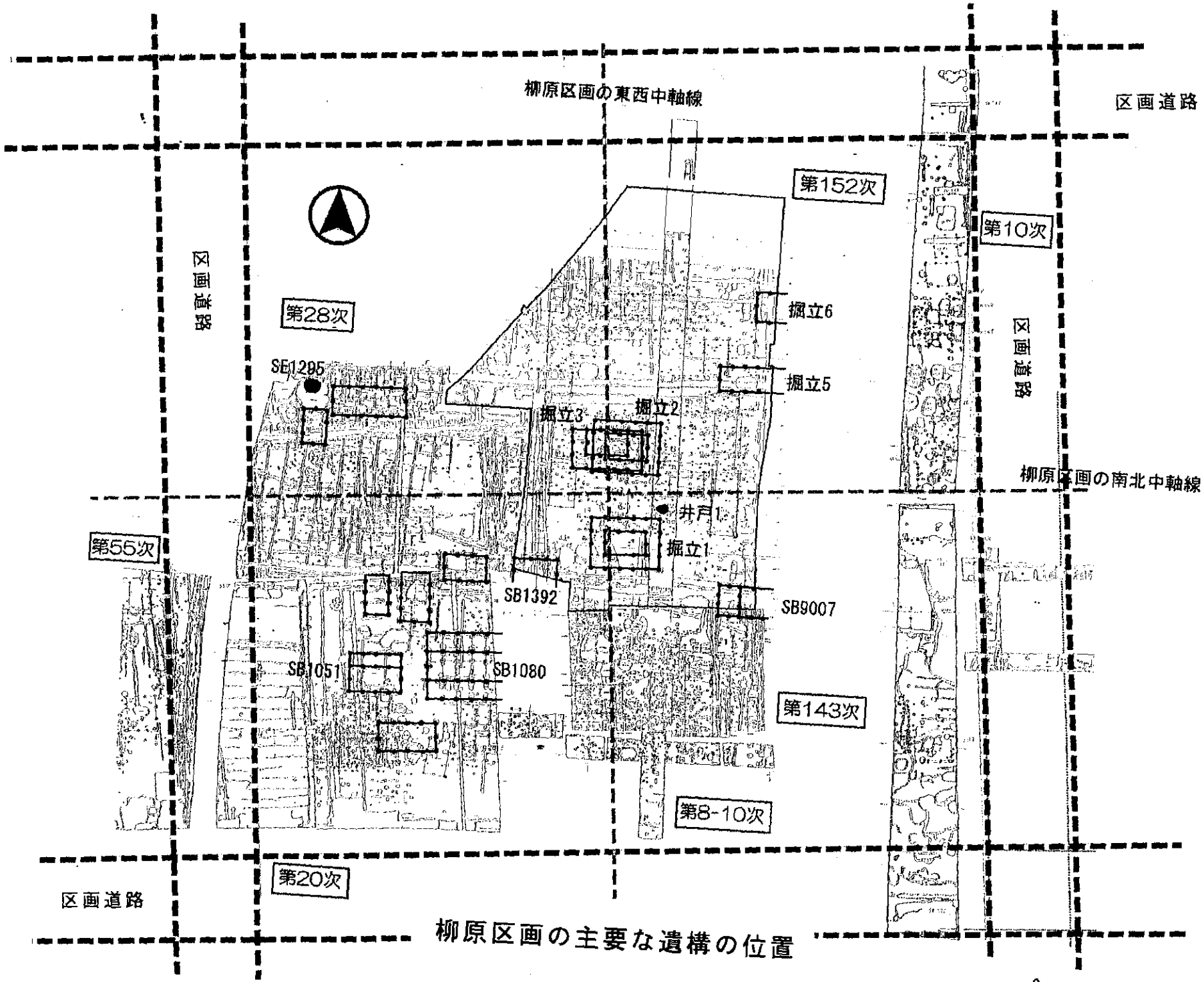
この他、４箇所ほど、直径３０ｃm程度の小さな穴に完全な形や大型の破片の土器を意図的に埋めたと見られるものが見つかっています。平安時代前期のものと後期のものがあります。このあたりの造成や建築にあたって地鎮などのおまつりをした跡ではないかと考えられます。

３　出土した遺物

第１５２次調査で出土した遺物は、現在のところ博物館で整理・収納するための整理箱で約１７０箱分ありますが、方格地割内部での他の調査例からみると決して多くはありません。これは現在の地表面から遺構を確認した地層までの間がとても浅かったことにもよるかもしれません。

出土遺物の大部分は、先に述べた土坑からのもので、土師器・須恵器の他、灰釉陶器などの日常的に使用されるものがほとんどです。一方、緑釉陶器は少なく、硯類やまつりに関わるとみられる遺物は今のところ全く見つかっていません。こうした出土遺物の量の割合は、この柳原区画の性格を考えていくうえでヒントとなっていくかもしれません。

今回の発掘で出土が期待された遺物に、文字を伴った資料がありますが、これも現在のところ墨書土器が２点見つかっているにすぎません。１点は土師器杯の底に「浄」かとみられる文字が、１点には陶器の椀の側面にひらがなとみられる文字が書かれています。



柳原区画の主要な遺構の位置

４　今回の発掘のまとめ

第１５２次調査は、平安時代の斎宮の構造をつくっていた方格地割のほぼ中心部を調査し、多数の掘立柱建物を見つけました。方格地割の中でも東部の区画では平安時代前期の終わりごろを境に急速に建物がみられなくなることがこれまでの発掘調査で分かっていますが、今回調査した柳原区画では平安時代を通して、斎宮の中での役割を保ち続けたことが明らかとなりました。

その中でも、一般的な掘立柱建物より格が高いといわれる庇付建物が複数発見されましたが、特に三面以上の庇付建物は、これまでの方格地割内の発掘調査でも４棟しか見つかっておらず、貴重な発見であったと言えます。そして、柳原区画の中でも、これらは区画のほぼ中心付近に計画的に立てられていたと考えられます。第２０次調査で見つかっている大型の二面庇付建物ＳＢ１０８０などとあわせ、柳原区画が斎宮の中でもいわば高級官庁街であったと言えるのではないでしょうか。

斎宮歴史博物館では、第１５２次調査に引き続き、今年度は今回の調査区の南で第１５３次調査を、また来年度も周辺の発掘調査を進める予定で、柳原区画の様子が次第に明らかになっていくでしょう。

※　斎宮跡の発掘調査で見つかった遺構は１万個近くあるため、これらを区別し整理するため、遺構の種類の略記号と通し番号をつけています。遺構の略号には主に次のようなものがあります。

ＳＢ　掘立柱建物　　ＳＤ　溝　　ＳＥ　井戸　　ＳＨ　竪穴住居

ＳＫ　土坑（大きな穴）